中学生がつくる美術の授業

中学生は、私たちが考える以上に「大人」です。
港区立青山中学校では2005年より地域の美術館と、
09年より教職志望の本学学生と協働し、中学生の
自立した学習を促す美術の授業に取り組んでいます。
18年3月まで同校校長を務めたのち、
本学で教職志望の大学生を支援してきた
福井客員教授が、授業実践とその成果を報告します。

福井正仁
Masayoshi Fukui
教師教育リサーチセンター
教職サポートルーム 客員教授

1979年から教師人生を歩む筆者。日本人学校などでも勤務。青少年野外活動リーダーとして活動中

「中学生がつくる美術の授業」は、2005年に港区立青山中学校の美術科講師で版画家の森恵美子（ツツミエミコ）氏が、森美術館に生徒を引率し、鑑賞の授業を実施したことにはじまります。この授業を玉川大学芸術学部芸術教育学科の髙橋愛准教授（当時）が見学し、大学生の参加を模索。そして、大学生の学修と中学生の学びとを連動させた協働プログラムに発展してきました。

私とこのプログラムの出会いは、13年、青山中学校着任時です。

青山中学校では生徒全員が3年間でジャンルの異なる3つの美術館に行き、デザイン、日本美術、現代アートを学びます。校長として、生徒の自立を促すこの実践の先見性に共感し、「中学生を『大人』に！」を掲げて推進しました。そして、本学では、教職課程受講の大学生を対象に、教育実習などの学校体験活動、教員採用選考の講座、「外国語（英語）指導法」などの授業を担当してきました。この実践が、大学生の学校での体験活動のモデルとなるよう関わりを続けています。

「中学生がつくる授業」とは？

このプログラムは、中学1年生の21_21 DESIGN SIGHT（港区赤坂）での鑑賞からはじまります。大学・中学校教員と大学2年生が展覧会を事前に鑑賞し、中学生の学びをイメージします。生徒は中学校で事前学習ののち、全員で同館を訪問します。

23年度は「もじ イメージ Graphic展」でした。同館プログラム・マネージャー中洞貴子氏のガイドにより、多様なデザインの作品を鑑賞しました。生徒には、興味深い作品をメモし、各自が「青山」のロゴをつくる課題が提示されました。大学生がつくった「青山」のロゴも事前授業で紹介され、中学生の制作意欲を高めました。

中学2年生は、サントリー美術館（港区赤坂）での日本美術の鑑賞です。同館教育普及担当の関香澄氏が中学校で、展覧会「虫めづる日本の人々」を鑑賞するための事前授業を行い、大学3年生が準備したワークショップを行いました。次年度は生徒たち自身が事前授業を実施するため、自分ならどのような授業にするかを真剣に考えながら授業に参加していました。そして、夏休み中に各自で美術館に行って鑑賞しました。

中学校3年間の集大成として、毎年3年生は、自分たちで授業をつくり上げます。希望生徒約10名が「ビフォア・チーム」を組織し、事前に各自で森美術館（港区六本木）を訪問します。その後、中学校に同館アソシエイト・ラーニング・キュレーターの白木栄世（えいせ）氏と大学4年生を招き、中学3年生全員を対象とした授業の組み立てを話し合います。生徒は、自分たち

中学校×美術館×大学による協働プログラム

2005年より近隣の美術館と連携する青山中学校。玉川大学も参画し、毎年プログラムを更新している

髙橋 愛 教授

芸術学部アート・デザイン学科教授。専門は美術教育。中学・高校の美術教員をめざす大学生を指導する

青山中学校

1947年開校。港区北青山にある公立校。校歌作曲者は玉川学園創立時の音楽教師 梁田貞というご縁も

玉川大学

2009年、芸術学部芸術教育学科の髙橋愛准教授（当時）が指導する大学生３年生が同プログラムに参加

美術館

2005年から森美術館、07年からサントリー美術館、15年から21_21 DESIGN SIGHTとの連携がスタート

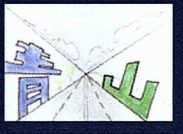
森 恵美子 講師

青山中学校美術科講師。中学校と美術館をつなぐ協働プログラムを開発した授業プランナー。版画家でもある

実践1：中学1年生×21_21 DESIGN SIGHT

「デザインを通して世界を見る場所」を掲げ、2007年に開館。15年より中学1年生対象の鑑賞プログラムを実施している

中学１年生と大学２年生が交流しながら、美術館の役割などを学ぶ。事前に大学生が鑑賞した同館展覧会の体験を中学生にどう伝えるかを考察。中学生は事前学習ののち鑑賞する



鑑賞後、中学生が制作したロゴ「青山」のラフスケッチ。展示や大学生作品の影響が見える

事前授業で大学生が参考作品として中学生に提供。影響を受けた作家や展示の見所を伝える

2023年度は、21_21 DESIGN SIGHT企画展「もじ　イメージ Graphic 展」(23年11月23日～24年3月10日)を鑑賞。副題は"辺境のグラフィックデザイン"。1990年代以降の日本語を用いたグラフィックデザインをメインに、国内外54組のグラフィックデザイナーやアーティストの作品が展示された

実践2：中学2年生×サントリー美術館

国宝、重要文化財を含む約3,000件を所蔵し、日本美術を中心とした企画展を開催する美術館

中学２年生の事前学習の様子。鑑賞前に美術館担当者や大学生から説明を受ける。その後大学３年生が企画した日本美術を感じるためのワークショップを体験（左）　展示を意識して、日本画の顔彩を用いた虫の絵を制作。制作物は大学生の描いた水墨画にコラージュして校舎に展示（右上）　美術館鑑賞後は中学校長や教員などを交え、大学生が振り返りや質疑などを行った（右下）

23年度は、サントリー美術館の「虫めづる日本の人々」(23年7月22日～9月18日)がテーマ。草木花鳥の表現が大事にされてきた日本美術において、さまざまな作品に登場してきた虫に注目し、中世～近現代の絵画作品などを通して、虫と人との関係を考える展覧会。伊藤若冲や葛飾北斎、鏑木清方らの作品が展示された

が感じたこともしっかり伝え、助言を受けます。

23年度は森美術館開館20周年記念展「ワールド・クラスルーム：現代アートの国語・算数・理科・社会」を基に、それぞれの作品の作者の思いを想像しながら、生徒は自分たちの考えを整理して、授業づくりを行いました。授業は、小グループのワークショップも取り入れ、大学生が各グループに加わって活動を支援します。

自分たちの仲間が組み立てた授業を受けた中学3年生は、時間をかけて準備された話に聞き入り、ビフォア・チームの自信に満ちた態度に驚嘆していました。この後、全員で森美術館に行って鑑賞します。生徒一人一人が、自らの視点で鑑賞し、気になった作品にくぎ付けになっていました。授業終了後は「アフター・チーム」も組織し、鑑賞の面白さを下級生にどう伝えていくかについて話し合い、校内の展示につなげていきます。

大学生の学びは？

本学芸術学部アート・デザイン学科美術教育コースの2年生は「美術科・工芸科指導法Ⅱ」の一環として中学1年生に関わり、3年生の「教育実習（事前指導）」、4年生の「教職実践演習」を通して、中学1年生が3年生になるまでの3年間、同じ生徒と関わります。大学教員が一貫して指導し、中学校教員も特別講師として大学の授業も担当します。

大学生は、中学校での3年間の体験を通して、生徒の多様な思いや感じ方に触れ、造形的な見方・考え方を働かせる姿から多くを学びます。また、カリキュラム・マネジメントの観点から、授業を構想する教員の思いや工夫、教科等横断的な学びの広がりも実感できます。さらに、美術館との連携を通して、人的・物的な指導体制についても学びます。この実践を契機に、さまざまな学校体験活動に参加する大学生もおり、教職への思いを強めています。

大学生は、生徒と一緒に活動し、作品鑑賞を通して学ぶ楽しさやよさを体験し、生徒の視点や感じ方を捉えることができます。また、中学校教員や学芸員との事前の打ち合わせを基に、生徒に事前授業を実施します。展覧会の内容に合わせて授業のテーマやワークシート、グループワークの内容を考え、「何を、なぜ、どのように学ぶのか」「何ができるようになるのか」を考えて実践します。とくに中学3年生の授業では、大学生が生徒の授業づくりに関わり、生徒がやりたいことを生徒自身が実現するために、思いや考えを聞きながら支援します。生徒を的確に見守る場面と積極的に支援する場面の判断ができるようになり、教職課程の締めくくりの学修となります。

中学生の学びは？

この実践は、中学生自らが授業を構想して実施するもので、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた、授業改善の工夫の一つです。

生徒一人一人は、興味・関心や特性が異なり、国語や数学、英語で力を発揮する場合もあれば、美術のような「技能教科」で本領が発揮できる場合もあります。この実践では、生徒が皆と同じであることを過度に意識せず、自分の強みを遠慮なく発揮できます。この活動で得た生徒の自信が、学校生活や他教科の学習にも波及しています。

中学生は、比較的年齢の近い大学生と3年間にわたって触れ合うことで、自分の将来の生き方や進路を考えるきっかけとなっています。また、卒業後も友達と美術館へ行ったり、この授業に参加したりする姿が見られます。

今後に向けて

私たちは、中学生はまだ子どもだと思い込みがちですが、それぞれに素晴らしい力を秘めています。中学生の言葉にならない気持ちを受け止め、それを表現させ、互いの気持ちが交流できる環境を整えることが私たちの大切な役割です。美術が専門でない私が、このプログラムに惹きつけられる理由は、大学生と中学生の学びがつながり、それぞれの主体的な学びが実現しているからです。

教職の厳しさが話題に上りがちな昨今、学校で生徒と接する体験を通してこそ、教員に必要なスキルを学び、教職の魅力が体感できます。今後、これからの子どもたちに求められる資質・能力の育成について、主体性、創造性、協調性などの非認知能力にも着目して実践を続けたいと思います。

実践3：中学3年生×森美術館

2005年に森美術館で行った中学2、3年生対象の鑑賞授業が、20年近くつづく協働プログラムの出発点に

有志のビフォア・チームは授業構築のため、事前に森美術館へ。中学生のサポートのため、大学生は同館白木氏のレクチャーを受ける（左）鑑賞後、事前授業のためのミーティングを中学生、大学生、白木氏が実施（右上）　ビフォア・チームによる授業を鑑賞前の生徒に行う（右下）

森美術館開館20周年記念展「ワールド・クラスルーム：現代アートの国語・算数・理科・社会」(23年4月19日～9月24日）が、23年度の中学3年生が取り組んだテーマ。8つの教科「国語」「社会」「哲学」「算数」「理科」「音楽」「体育」「総合」を現代アートの入口に、未知の世界へと誘う展覧会。各作品は教科別に展示された

中学生、大学生の声

プログラムに参加した中学生と、中学生を支えた教職志望の大学生に、終了後の感想や思いを聞きました

中学校3年生になると、一人一人が自分なりに美術という営みを感じ、考えて、自分の一部へと昇華しようとしている。生徒たちは、友達と意見を交わしながら、学芸員や学生と触れ合い、自分と向き合いながら、自分なりの鑑賞ができている（大学3年生）

教育実習前に中学生と話すことで、中学生の成長段階を知ることができた。中学生は指示をしないと動けないと思っていたが、授業を通して、「場があれば活動できる」ことに気付いた（大学3年生）

皆バラバラのことを考えて一つの作品を見ているのがおもしろい。美術は作品を色々な人に見てもらえる。身近なものも作品になることを実感した（中学3年生）

中1の夏休みの宿題で初めて美術館に行ったが、正解がなく自分で感じ取らなければならないので非常に厳しいと感じた。中3でビフォア・チームとして事前に作品を見て、「これ何をしているんだろう」と思った自分の気持ちを皆に伝え、皆にも味わってほしいと思った。作品制作は、目的が確実でないものをやってみることに意味があると感じた。生きていく上では、点数とか皆が比べ易いものではないものも大事だと思った（中学3年生）

中学生がつくる美術の授業リーフレット

2005～2024年まで毎年実施してきたプログラムの内容と実践を紹介。青山中学校HPのコンテンツから内容を見ることができる

港区立青山中学校公式X（旧Twitter）

日々の学校生活や教育活動、行事の模様などを発信中。協働プログラムの様子も、写真とともに紹介している

森美術館公式YouTube

青山中学校生徒が授業で出会った現代アートを語る動画「森美術館ラーニング・プログラム参加者の声 #4」。約12分